

Title	現代中国文学に見るテキスト修訂：阿壠『風雨楼文輯』校勘序論
Sub Title	About some variations in the modification on Chinese modern literature : a note for textkritik of Ah-Long's Fengyu-lou Wenji
Author	関根, 謙(Sekine, Ken)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 中国研究 (The Hiyoshi review of Chinese studies). No.1 (2008. 3) ,p.143- 176
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20080331-0143">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12310306-20080331-0143</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代中国文学に見るテキスト修訂——阿壠『風雨楼文輯』校勘序論——

関根 謙

一、はじめに——問題の所在

一九六七年三月二一日、阿壠<sup>①</sup>は失意と憤怒の中で、病魔に冒され天津監獄の独房で亡くなった。二〇〇七年はその四〇周年だったことになる。筆者が胡風事件と阿壠を研究テーマとしてからもうすでに二〇年近くの年月が流れている。この間、阿壠の遺稿である「南京」を半世紀ぶりに『南京慟哭』として翻訳刊行はしたものの、そのほかには自信をもって語りうるものはなく、在天の阿壠に申し訳ない思いを消すことができないでいる。

また筆者は阿壠の遺児陳沛氏の協力で、さまざまな資料を見る機会に恵まれたのだが、それすらきちんとした形で世に出せないままこの四〇周年を迎えてしまった。振り返れば自らの怠惰と無能に恥じ入るばかりであるが、自分自身を叱咤して阿壠研究を再構築するために、その第一歩として、阿壠のエッセー集『風雨楼文輯』<sup>②</sup>のテキストクリティークをはじめてみたいと思う。

## 二、過去の改変の例から

阿朶「文輯」を問題にする前に、現代中国文学におけるテキストクリティクの意義について、考えておきたい。現代中国文学研究者にとって本文批判という作業次元は、あらゆる研究の基礎とならねばならない。それは、文字の国「中国」が、想像を絶する文字の獄——言論抑圧の歴史の中にあるということと離して考えられるものではない。また、近代の印刷技術の黎明期から発展期を一気に駆け抜けていった中国出版界には、多くの初歩的技術上の間違いがあって、その訂正のために、本文訂正の必要が生じたという事実も考えられる。このほかにも、近代以降海外の文明思潮を急速に受け入れなければならなかった中国文学界には、文体自体が大きく揺れ動いており、そのため後の編集過程で文字に対する修正が余儀なくされたという点も無視できない。

### 1、雑誌「新月」の例1

以上の状況を踏まえて、具体的なテキスト改変の例を見ておこう。私たちはその好個の例を、一九二八年に創刊された文芸雑誌「新月」<sup>3</sup>に掲載作品がその後どのような改変を加えられているかを見ることによって、知ることができるとする。

「新月」創刊号<sup>4</sup>には沈從文の《阿麗思中國遊記》（「アリス中国旅行記」）が掲載された。目次からもわかるようにこの作品は、徐志摩の巻頭言、梁実秋の論文「文学的紀律」に続いて載せられたもので、小説としては「新月」派登場の第一小説と位置づけられる重要な作品だった。この作品は後に『沈從文文集』<sup>5</sup>に掲載され、そこに一部改変

の跡がうかがえる。「新月」の《阿麗思中國遊記》原文をもとに、後の『沈从文文集』との相違を、確認にしておく。

他是①年紀有了四十五歲，有些智識②卻不及一半年齡。受潔淨是凡為一個孤身兔子紳士的習慣，但這個他卻在受③身體體面以外且愛行為的體面……這一點事上是值得引起那些刻薄的紳士非難的。儼喜先生遇事愛體面，把一年所有的收入，一千二百鎊金洋，全花到一種不明不白的耗費中去。只是一個孤身老頭，卻不想娶妻，也不同一些有錢寡婦來往（這是其他紳士頂不以約翰儼喜先生為然的一種④。）掙來錢就花費，這似乎是不免應出⑤在一種社會批評下得到不好名聲的。然而約翰儼喜先生卻不顧慮到這些事情上來。自己所歡喜得，還是依然作下去。喝一杯兒酒，到老朋友處談談閒天，有戲看過高興時⑥也看看戲，〈⑦〉想到別處城裡去玩⑧就一個人帶了錢包走去。愛漂亮的動機，就只是愛漂亮，也不是像⑨其他紳士收拾打扮是為得⑩到佃戶家去佃戶女兒作樂。碰到窮人要他幫助的，總是答應下來，看這人所需要是甚麼事，設法去幫忙。無聊時節愛看一點小說，這小說也不拘是十四世紀或十九世紀的，不拘誰個名家的小說，都能够在一種意外情形下博得這良善的兔子一點眼淚，〈⑪〉他無事就把那個和平正直的心放在一本書上，讓這一本書的一些動人情節動人語言搖撼著，揉打著，于是他就哭了又笑。烟是不吸的⑫，酒是剛才已經說過，喝也只喝一點兒，實則⑬這一點兒也就能夠把這兔子成為更可愛的了。（「新月」創刊号四十一頁）

修訂の内容は次のとおりである。

①削除

- ② 「人情世故知识」の語句を補足
- ③ 明らかな誤字、「爰」に修正
- ④ 「一种固执」と補足
- ⑤ 「应该」に書き直す
- ⑥ 「兴致好时」と書き直す
- ⑦ 「不论古典的希腊悲剧，还是最现代喜剧」と補足説明を加える
- ⑧ 「玩玩」と補足
- ⑨ 「不象」と短縮
- ⑩ 「为的是」と書き直し
- ⑪ この部分から次行の「……哭了又笑」までを（ ）で括る
- ⑫ 「他不吸烟」と書き直し
- ⑬ 「其实」と書き直し

わずかこの一段落のみで、十三箇所の修訂があつたのである。この部分での修訂の意図は、②や⑦の補足説明の付加に端的に現れている。編集者は極力、削除したり補足したり、あるいは表現を書き直したり、さまざま工夫を駆使し、現代の読者にわかりやすくしようしているのである。⑪のように、わざわざ括弧でくくることによって、原文自体を説明的に見せるといふ離れ業さえ使っていることにも注目したい。これは後に引用する他の修訂と比べると、きわめて善意な編集態度と言える。この文集の巻頭に置かれた「出版説明」によると、本書こそ「もつとも

完全な著作集」であり、原著者沈從文自らが最終的な校閲に参加して間違いを正したと言明している。

このように『沈從文文集』が正当で善意な編集作業を経て出版されたとしても、原テキストに編集修訂の手が加わった以上、「新月」に掲載された初版の雰囲気<sup>②</sup>が正しく伝えられたかどうかはやはり疑問である。少なくとも筆者には、原文で生き生きと表現されていた沈從文のリズミカルな文体が、簡単にまとめられてしまったというように思えてならない。なぜ、<sup>③</sup>のような明らかな誤字の訂正でよしとすることができなかったのだろう。このようにばつさりと修訂された跡をたどると、中国の出版界では、原作者の文章を後世の編集者の一存で変えてもかまわないということが、一種の「常識」となっていると**言わざるを得ない**。これは文献に当たる場合、**私たちが肝に銘じておくべきこと**だろう。

## 2、雑誌「新月」の例<sup>2</sup>

次に「新月」第二号<sup>④</sup>からもう一例を挙げてその修訂の特徴を確認したい。ここに引用するのは、凌叔華の小説「瘋了的詩人（狂った詩人）」の一節である。原文は「新月」第一卷第二号に掲載されていた。後の『中国現代文学作品原文選印——「花之寺、女人、小哥哥」（凌叔華）』<sup>⑤</sup>所収のテキストと比べてみると、その大きな**改変に愕然とせざるを得ない**。

「**拿油畫的**①**刷子畫**這雲山的景緻②**夠多笨**！況且這飄渺輕靈的雲山那能等你對寫呢？它一分鐘裏不知變多

少次，縱使你能夠趕快的擒著東邊的一角，西邊已經不同了。這色彩濃淡也因雨雲的厚薄，天光的明暗變化的，

這天地迅速的化工那能你凡眼追隨呢？寫生畫常常看看很好可是不能使人徘徊細賞也因為輕略了化工的神速，

過信凡眼的能力吧。」③

他想著把畫箱放在一邊，「可是，難道我們寫生是不可能的事了嗎？」「外師造化，內會新源」的話古人雖然說得不錯，可是這師的法子除了寫生以外，還有什麼別的好法子呢？④」即使我們的眼像電影照相一樣，一張緊接一張的連續著一厘不能錯，我們的注意力和思想能夠那樣聽命令嗎？」他不覺嗤了一聲，「即使它們那樣聽話，可是一個常常可以叫它停止的思想，自然是帶些機械性質的了，這機械性質的腦子那裏會有什麼空靈飄渺不平凡的出品呢！」

雨已是止了，松叢中忽然飛出幾隻黃色的小鳥嚙嚙的叫著斜飛下山去，因為它們一動彈，松針上的雨水洒了驢子一身。（「新月」第一卷第二号「瘋了的詩人」二頁）

修訂の内容は、①を「这样」と簡単にし、②は削除、③の長文はすべて削除、④の冒頭から最初の長文の述懐まで全削除し、次行の「即使……」以下の思考を前段につなげてしまうという凄まじいものであった。

これは明らかに、「わかりやすく」するための改変などではなく、面倒な描写を一切省いてしまえという、乱暴極まりないぶつ切りと言わざるを得ない。なお付け加えると、ここに引用した部分はまだ「瘋了的詩人」の筋を汲んでいるとみなせないこともないのだが、後半にいたると、会話も叙述も変更されてしまった部分が目立ち、ストーリー自体が別なものに見えてしまうほどなのである。

この凌叔華の作品に対する改変には、沈從文に対する改変とまた違う問題が見えてこよう。沈從文の場合には、編集者の原作者に対する尊敬の念が感じられ、原作の雰囲気壊さない態度が伝わっていたのだが、凌叔華の作品に対してはその最低限の慎みすらなく、杜撰な編集によって原作が無残に切り刻まれてしまったのだ。憶測の域を

出ないのだが、ここには沈從文と凌叔華の大陸における評価の相違が現れているのかもしれない。沈從文は文化大革命後、郷土文学の名手として安定した評価が確立されているのに対し、凌叔華に対する評価はその海外の名声から見ると異様に低いのだ。文学史上の評価が原作に対する編集者の態度に明らかに影響しているのである。中国においてはこの事実が物語るように、改変のひどさは評価の高さに反比例するようだ。

引用した一九八六年版の作品集『花之寺……』所収の「瘋了……」のテキストは、その後編まれた《凌叔華文存》（四川文芸出版社、一九九八年刊）や《凌叔華文萃》（文化芸術出版社、二〇〇二年刊）にそのまま引き継がれている。

### 3、微妙な改変の例

雑誌「新月」所収作品が後年刊行される際に加えられた改変は、中国出版界の典型的な態度を示していると思われるのだが、このほかに、微妙に政治的な傾斜を見せる改変の例、別な言葉で言えば、政治的理由を隠すように見える改変の例を示しておきたい。

这样说来，国民文化的提高就是被列在全人民动员的持久战的预算里面，只不过这还是在刚刚开始中的新的方向，有时甚至被目前的主要任务，同时也是为了使它实现的基础工作——初步启蒙的「普及」工作所淹没。（一九四三年版）<sup>8</sup>

A



这样说来，国民文化的提高就是被列在全人民动员的持久战的预算里面，只不过这还是在刚刚开展中的新的方向。一般地说，目前的主要任务，同时也是为了使它实现的基础工作——初步的启蒙教育即「普及」工作，是站在前

B

面的。<sup>9)</sup>  
(一九九九年版)

この二つの文章は、胡風の「民族戦争與文芸性格（民族戦争と文芸の性格）」の一部のテキストであるが、上記の一九四三年版と一九九九年版には、微妙なニュアンスの差が読み取れる。傍線部分Aを直訳すると「甚だしきにいたっては、当面の主要な任務によって、そしてまた文化の向上（＝それ）の実現する基礎的な工作——初歩的な啓蒙教育すなわち『普及』の工作——によって、埋没されてしまうことがある」となり、「国民文化の向上」が「持久戦」理論の中にあらかじめ組み入れられてはいるのに、目下の段階では新しい闘争の方向において「埋没」されがちであることを指摘し、その傾向に明らかな批判を加えている。これに対して、書き直された傍線部分Bでは、「一般的に言って、当面の任務であり同時にそれによって実現される基礎的な工作——初歩的な啓蒙教育すなわち『普及』の工作——は闘争の前面に置かれるのである」となっており、「文化の向上」よりも急がれる任務が「普及」であることを一般論化してしまっている。

当時中国共産党は国民党との連合による重慶政府によって抗日統一戦線政策を推し進めており、その文化面での基本方針である「普及」第一主義に対して胡風は、文化の向上なしに普及など考えられないという立場を取っていたのである。引用した箇所に取り上げられるニュアンスの違いが、胡風サイド（出版当時、胡風はすでに故人となつてはいるのだが）から出たものなのか、それとも出版社がさりげなく書き換えてしまったのかは不明だが、一九四三年の胡風は一九九九年の胡風よりもズバズバものを言っていることだけは確かである。この問題に関しては、拙

論を参照されたい。<sup>10)</sup>

こうしてテキストの改変例を見てくると、現代中国におけるテキスト修訂はだいたい次の三点の特徴を持っているとまとめていえる。

第一は、印刷技術の未熟などの理由によるもので、誤字脱字などに対する当然の適切な修正である。第二は、後世に行われた文学史的な位置が低い場合に見られるもので、まったく手抜きによるというほかない杜撰な改変である。そして第三が、政治的理由によるものと思われる自己防衛的修正で、胡風など現在なおその思想的復権が確かでない文学者などに見られる微妙な修正や削除である。

こうしたテキスト修訂の傾向を前提にして、阿壠の『風雨楼文輯』の中から四編のエッセーを選んで検討してみる。

### 三、阿壠著『風雨楼文輯』とテキストの修訂

阿壠はさまざまな顔を持つ複雑な人物だった。中国現代文学の世界において阿壠は、詩人として、作家として、そして文芸批評、文芸理論家として、かなりの数に上る業績を残している。文芸批評のジャンルにおいては、大作『詩與現実』全三巻があり、その公刊された一九五二年は阿壠の執筆活動の頂点だったと見ることもできよう。『風雨楼文輯』はこの前後にかかれた未発表の原稿を中心にまとめられたものだが、阿壠自身がこのような形を構想していたのではなく、原稿を預かった編集者路莘が苦勞して校正編集した結果、賈植芳主編の「世紀回顧筆叢」の一として出版されたものである。阿壠はもちろんこの書のタイトルすら考えてはいなかった。

文輯は三つの構成部分からなっていて、第一部分に抗日戦争時代から内戦期までの随筆、第二部分に人民共和国建国後、一九五五年の阿壠逮捕までに書かれたと思われる随筆、第三部分に何らかの形で発表された書評や評論などを配している。

阿壠の原稿は逮捕監後に公安警察の機密文書として保管されており、阿壠の名誉回復後に遺児陳沛に返却されたものである。路幸はこの原稿のコピーを編集して最終的にこのような形の文輯にまとめて刊行した。筆者も陳沛から同じ原稿をいただいており、本稿はそれに基づいている。以下四編のエッセーを見てみる。

## 1、「日常的东西」(三〇頁)

是得写日常的东西。

但这不能是罗列现象。和自然主义完全相反。所提出的，仅仅是这样的—一个要求：本质地从生活来写吗①？

愈是日常的，愈是生活的。

人，不是生活在别的什么地方，而是生活在日常生活世界当中。

对于人，那么，愈是日常的，愈是使他感到了生活的亲切，感到那血肉相连。

也和这相反的，那浪漫派的彩笔，即使富于诱惑，却总和人有着生活的距离。和人痛痒不相干——即使是一种奇痛和怪痒，人也不能从自己的生活世界里把它赶到。

这是一个最平凡的道理。但也是一个最本质的道理。

愈是日常的，愈是感人的。

愈是日常的生活现象——是在我们的社会生活中的，那异常宽阔的现象，不断反复的现象，不是偶然的——愈是

关系着②或关系到千万人的命运的现象。

——到这一点，则它又本质地和写英雄人物与英雄事迹的要求完全相通。

原文コピーとの異同：

- ①「吗」を付加。  
②而且是关连着

注釈：ここから文学の素材と叙述の方向に関する阿嬭のエッセーが始まる。彼は現実の生活から生じる日常のものを素材とせよと主張する。空想的なあるいは理想的な生活は、現実の本質から離れるがゆえに、退けられなければならない。ありふれた現実の生活に存する本質的なものを描くことによって、多くの人々の命運にかかわる実相が現れると阿嬭は考えた。

このエッセーに関しては、原文コピーとの異同が二箇所。以下、それぞれのエッセーにおいて原文コピーとの異同を記すことにする。

## 2、「关于人物」(二二頁)

关于人物，D这样说①：『人们摘花果，但却不要那地下茎。』

是的，人们往往②不看，也往往不能看见地下茎的存在。即使那是和地上茎同等巨大，而且坚实地支持着和负担着地上茎的全部重量，而地上茎也正是从它出发而蓬勃生长的。即使失去了它或忘却了它的时候，花果也就成为无根的存在，而不能③还有什么辉煌于阳光里和摇曳于春天④里的鲜美生命。

采摘花果是最容易和愉快的事。但地下茎，不但挖掘它是吃力的事，就是看见它也非常容易的事。

但现实，那根，那主根，以及根须，却是在地下，深深地在地下，巨大而坚固地在地下的。

然而概念，却飘飘然在花果上似的。

事情并不如此。但事情又偏是如此：人们仅仅喜欢摘花果。但不是采摘来了⑤虚花和空果，就是采摘来了⑤自己的幻觉之花和观念之果。

但现实主义，却要深深地掘入那地层，深深地触到那地下茎；然后，那花果生长起来，被把握起来。

## ⑥

N曾经说：『人物就是社会。』这极好。

因此，他否定『为人物而人物』的那种说法。

因为，这和『为艺术而艺术』的根据和条件都根本不同。

因为，『为艺术而艺术』的艺术倾向，原来是反现实的东西，不是观照人生的东西。

但人物，却必然是现实的血肉的东西。

『为人物』，很不容易。如果『为』好了『人物』，那就再好也没有了。因此，『为人物而人物』——当作『为艺术而艺术』，那根本就是不通之论。难道，艺术不是从人物出发的吗？难道，还有另外一种非现实的血肉的火星上的『人物』的⑦吗？

但是⑧，却也透露出来一种反现实的艺术倾向，因为否定这『为人物而人物』的说法，正是否定人物的说法。

从来，如果那真是写好了人物的，⑨往往就是现实主义的。

从来，写人物写的好的作家和作品，在一定的历史内容和历史意义上，总往往多少地是斗争的。

如果说，今天我们的现实主义，是比过去的一切的现实主义站在一个更大的历史高度上——那么，当人物被这样否定了或否定着的时候，还能够一些什么东西呢？

人们，今天也开始说到从人物出发了。这极对。开始感觉到非摆脱概念不可，非得从人物出发不可，当然对，当然好。但人物，又从哪里出发呢？

人物，是从现实生活内容出发，是从社会——历史内容出发。因为人物是在社会中，是在历史发展的过程中。因为『人的本质是社会关系的总和。』

但事情怎样呢？

人们，一方面说，得从人物出发。

但另一方面，则又抽象地反对所谓人物的『落后性』，和抽象地强调某些人物的『新品质』——从原则说来，仅是从原则说来，这也好像完全对，好像并不错。

⑩

但所谓新的人物，和人物的新的品质，却像一种水晶球，那么透明，那么浑圆——这样的人物，还是非社会的、非历史的存在，还是非现实的存在，还是抽象的存在，还是徒然的。

那么，好像反对概念化，而肯定从人物出发了。其实，前者一种脱离了生活的人物的观念，后者，一种抽象了生活的人物的观念，二者是没有任何的根本的区别、本质的区别的。那么，这就不过是：以概念反对概念而已。或者以概念救活概念而已。

⑪

另外，一方面，主张『辩证唯物论』的创作方法，（简直忘记了对拉普的清算，和不要现实主义了）：一方面，

却又不知道新质发生于旧质底胎内这一辩证过程、历史过程。结果，前一点，也成为一种观念；后一点，则新的品质又被抛弃了生根的土壤，开花的基地。

新的人物，这样，就不是从血肉的斗争发展出来。从而非斗争的新的品质，也是出奇的事物。这是不对的。但人们，就是这样观念混乱而已，形而上学的泥浆而已。

不理解历史，就不理解现实，就不理解人物。

原文コピーとの異同：

- ①关于人物的D的话，他这样说：
- ②往往
- ③不可能
- ④春风
- ⑤摘了来
- ⑥行を変えてアステリスクを二個挿入
- ⑦「的」を付加
- ⑧但这
- ⑨「总」が削除
- ⑩削除された文章：

但所谓『落后性』，到底是什么和怎样的呢？ 某些『新品质』，又是从哪里来的和怎样的呢？

这可以看看加里宁底「论共产主义教育」，和日丹诺夫关于「星和列宁格勒」的报告，也看看那里面的话是怎样说法的吧——但这还没本质地、全面地来看。

⑪削除された文章：

这是即使以『革命的浪漫主义』来理解，也浪漫不到那里去，因为无论如何浪漫法，也决不可能浪漫到不爱人物所有的和应有的以及可能有的社会——历史内容以外去的——除非，那是十九世纪的资产阶级的浪漫主义。

注釈：阿瓏は文学における人物描写を花にたとえる。花の美しさは地中深く這い回る根茎によってもたらされている。活きた人物描写も同じで、文学に現れる人物が現実の中から生まれなければならないことを説き、またそのような人物とは現実の生活、現実の歴史から生まれることを主張する。阿瓏は当事の文芸理論が陥りやすかった抽象的な人物像、「新」人物像、そして「落後した」人物像などを厳しく指弾する。文中のD、Nなどで現される人物が誰なのかは、よくわかっていない。

またこのエッセーの原文から「革命的ロマンチズム」に対する批判の内容が削除されていることに注目したい。ソ連の人物名、カリーニン、ジダーノフなどが削除されてしまうのも、この文藝編集の傾向として留意しなければならない。

### 3、「新的人物、新鮮事物」(三四頁)

新的人物或人物底新的品质，是在产生，正在产生。这是①我们今天的一个主题，以大的比重提出了要求的主题。但，从而也就可以理解：新的人物或新的品质，是一个发展的形态，而不是一个完成了的形态。

所谓『完成了』的东西，意味就是：它是普通的东西，它是过去的东西，所以，这就失去了对于它的要求底迫切性尖锐性了；还如同丰年的粮食或夏天的皮毛，或是一般的需要，或是过剩的货物，或是不及时和过时的东西，与②在饥着的年代或严寒的季节那情况是完全不相同的。

但理解这发展的形态，就是理解『新质发生于旧质之胎内』这一历史的、生活的辩证过程和辩证逻辑。也就是依靠马列主义的洞察力，从那旧的事物底堆积中去看出新的事物底基③芽动向。

不过，有人却说这是『落后』，这是对旧世界的顾盼多情等等，等等。



但向一个发展的东西，一个生长的东西，一个萌芽的东西，都要求『完成』的以至『完整』的形态——那『完成的形态』就是不得不是抽象的形态！——从而，这就不是现实主义，这就不是生活逻辑，这就不是辩证的——历史的唯物论，而是超现实的（④）割裂⑤历史的，公式主义⑥的了。

问题是，对于新的人物，怎样去看出来在相对量的非优势中那绝对的质的优势。

问题是新生的东西和因素，怎样在新旧矛盾中斗争地发展出来的如实的把握中⑦展开⑧。

（⑨）

N也说到：『什么是新事物？新事物就是新的矛盾。』

他又说：『对新的矛盾失去感觉，那就成为庸人。』

原文コピーとの異同：

① 这样这才是      ② 和      ③ 胚      ④ 削除された語句……但不是革命的浪漫主义

⑤ 割断      ⑥ 教条主义      ⑦ 和      ⑧ 望      ⑨ アステリスクを二個挿入

注釈：阿瓏はこのエッセーで、新しく創作される人物像が浮ついた根無し草であることを再度強調している。弁証法的唯物論のロジックに基づき、新生の事物が「旧質的胎内」からしか生まれないことを説き、マルクス主義の科学的洞察力をもって古い堆積物の中から新しい資質を見出すように呼びかける。

この文章からも「革命的ロマンチズム」が削除されているのだが、ここでの用法は真の革命的ロマンチズムの主張であって、批判しているわけではない。この後に続く「公式主義」が「教条主義」の言い換えであることを

併せて考えると、編集者サイドの過敏ともいえる配慮がうかがえる。

4、「关于现实、关于生活」(第一部分、三二六頁)

一个人，可以自豪地，说他是站在整个地球上。而他也真是站在整个地球上的。

但同时，他也不过仅仅地站在他那脚下。使自己谦虚，而谦虚能够反省。自满和自豪相反，谦虚也不同于懦弱。

①

②

飞翔——多好。

但无翅而想像飞翔，没有可能。

鸟在起飞的时候，人都看到：它展开洁白的两翅，弯曲绯红的两腿，微微地使小小的身体低伏而更接近地面，以两双美丽的脚爪在地面上那么一跳，然后，它纵身而起，它高翔入云。

不这样，有翅的鸟，也不可能起飞。

③

鸟的起飞，第一个动作就是从地面出发，第一个力量就是从地上得来。

黄昏的时候，窗外，百鸟归巢。

鸟过着天空的生活。但黄昏的时候归来。

鸟的世界是无限的天空④：或是千里的晴碧，或是一片霞彩，或是春风和马尾云，或是龙卷风和雷雨，或是虹的长桥，或是云⑤的部队和闪电的旗帜……

但鸟黄昏归来。地上的家，每天的家⑥。

⑦

生活是无限的，而同时又是有限的。无限和有限。有限而又无限。有限而又无限。

即使在最激烈的战线，即使是最勇壮的人，正如同那大海中的一波⑨的一滴。对于整个形势和全部过程，他乃是一兵一卒（即使⑧）是一个团长的地位也同様）。但他底每一个动作底意义⑨底作用，他所据守的每一寸⑩阵地，他所发射的每一粒⑩子弹，他所毙伤的每一个⑩敌人，却影响到整个战线，影响到整个战役，并且，还影响到深远的后方，全国的人民。

人，是个人而又是社会的人。他，和他那生活，是在社会关系里。是在历史运动里。是在过程里。他以每一个人作为他底对象而活动，而自己也是做为每一个人底对象而存在。他活动，他底活动是有对象的活动，他底活动是对象化了的活动，从而他底活动又是被对象规定了和规定着的活动。而作为他底对象的一切人也如此。他以活动改变着他，改变了和改变着他们自己。人是这样生活是这样拥抱全世界，和参与历史的斗争。

善于生活，勇于生活。一切是实践。

一步一步地走，一分一寸地突进，一点一滴地积累，一砖一石地创造。这样出发万里长征，这样有了万里长城。

脚下面的土地是有限的；但宇宙是无限的；而行走的脚则是有限而又无限的。

生命是有限的；但历史是无限的；而现实生活的参与则是有限而又无限的。

不是宿命论，而是创造者，战斗者。

不是妄想狂，而是实践论。

动物式地安于小的生活，那就失去大的生活乃至敌对大的生活，而在那种生活中沉没——宿命论的生活。

看不起或看不见小的生活，又何尝真正看见了大的生活，又何尝能够取有大的生活？他会在那里漂浮过，只在那里滑翔而飞——妄想狂的生活。

既不绝望于一兵一卒的地位，也不否定一兵一卒的作用，而是：为一兵一卒的生活坚决斗争，从一兵一卒的生活勇往迈进。

有限的生命，无限的世界。

有限的存在，无限的过程。

有限的形式，无限的内容。

才窘困地给人写了回信。好，现在你又给我出了难题：『为何生活？』——这样的问题简直像一片茫茫的大雾。你把我弄到这样的大雾里来，还要我做罗盘。但我首先问你：在这个大雾里，你要我怎样走法？

幸好，刚才被人逼出来的那封信，问题和你不差不多：『怎样写作？怎样找写作的材料？从那里写起？』——我是怎样回答他的呢？

我把问题略微改动一下，改成了下面的样子：『怎样恋爱？怎样找恋爱对象？从哪里爱起？』——因为恋爱也是一个生活现象。而且青年人对它比较熟悉，容易理解，也有不少可歌可泣的想象。我这样反问他。但我不是危难他，而且要他去想。

如果去问一个年龄较长的人，怎样生活怎样恋爱之类，当然，他总是有些东西可以告诉我们的。不过，还是有着问题。因为，这一个人和那一个人，虽然他们之间有那种共同的东西，例如，社会成份、社会因素、生活方式、生活作风，等等；但那不同的东西，还是可以 and 相同的东西一样多，甚至会更加多<sup>①</sup>，例如，你走的路和我走的路不

同，你做的事和我做的事不同，你底遭遇和我底遭遇不同，你底对象和我底对象不同，等等，这里面的东西就是千头万绪的，千变万化的。所以，我可以告诉你我底生活经验或恋爱经验，也可以给你帮助，给你参考。但最多也不过如此。超过了这一点，那就行不通。因为，我不能代替你生活，也不能代替你怜爱；你也不能依照我生活和恋爱。要生活就要自己去，要恋爱就要自己去，一切要自己去。这里没有什么千古不朽的固定的方法，没有那种白病奏效的神奇の『秘诀』。

前几天，一个同志讲了一个笑话，也是实事。有一个人，为了恋爱，跑到这里请教人，跑到那里也请教人，就像采花的蜜蜂一样，回家以后，又像酿蜜一样，把得到的那些宝贵的经验，精精细细做了一个提纲——第一次和女同志去谈爱情问题，说一些什么，话又怎样说法，等等。他以为，这一定可以使人沉醉。但结果却是适得其反。

这是什么缘故呢？我这样想：旁人的经验，虽然很宝贵，很香甜，但却并不等于或符合于自己的生活 and 感情。用旁人底声音，怎样可能唱好自己底情歌？而且，我还仿佛看到：他那脸上有七八张旁人的嘴巴，同时他是在对那七八个旁人底爱人说话，——一部异常复杂的爱情交响乐演奏起来——就是说，完全和他自己、他那对象不相干。他那对象不能从他底声音里感到他自己底灵魂，也不能从他那灵魂里感到她自己底存在，结果就可想而知。

但恋爱，总要有爱情，如果有了爱情，感到这个爱情，就去恋爱吧，何必问人呢？问人何用呢？生活也一样。要有生活感情。生活就是爱情，要它爱你，就得自己首先去爱才行。爱你底生活世界吧，爱着，它就会为你揭下它那面纱，也爱你而和泥共同生活，而你也就懂得你好为它和自己如何生活。如果，对于对象没有爱情，对于生活没有爱情，即使旁人谈了许多经验，仍然没有好处。爱吧，行动吧。

但使我感到奇怪：这样说话，好像，他是一个出生的婴儿。好像，他是从月球来的宾客。好像，他是存在于真空管里。

我不是责备你。我理解你底意思，是要生活得好些，好些，更好些。但有了要求也就有了苦闷，什么是最好的生活呢？怎样才可以生活得更好呢？等等。

这使我想到爱伦堡底话。他说音乐家或舞蹈家，开始得愈早愈好；但要做文学家，则开始得愈迟愈好。因为，前者有某些生理上的条件。因为，后者所依靠的是社会生活里面的东西，是社会实践得到的，不是从娘胎里带来的，不是在身上长着的。而且，生活实践，生活经验，不是一天两天或一年两年就算毕业，就能得到的。生活的东西是无限的。一个作家，一方面得向生活世界章鱼似的伸张他的触手，一方面又是一个长期累积过程。这需要时间，漫长的时间，而且是紧张的时间。在生活里，没有不劳而获的便宜货。上面说到爱情，这里说到劳动，那么可以说：劳动和爱情，就是全部的生活的『秘密』。我们去发现生活是什么，和它是怎样的『秘密』。一天又一天地劳动，于是生活的货仓<sup>⑬</sup>丰满起来。纯洁而勇敢得去爱，于是爱情的结晶诞生下来。活的作品，往往带着作家底汗和血液和世界相见。『四十岁开始』——这一句平凡的话，就正是爱伦堡底可贵的经验。累积了四十年的货仓<sup>⑭</sup>打开来就不会一无所有。四十岁生孩子也不算太迟。而首先是参与生活。而最后也是参与斗争。

原文コピーとの異同：

- ① それぞれ一文で独立して行変え。二行目は「而」が加えられる。
- ② アステリスクを二個挿入。      ③ アステリスクを二個挿入。
- ④ 大空      ⑤ 密云
- ⑥ 但是，黄昏的时候归来。

鸟底巢——是在树上，鸟底家——是在地上。

每一个黄昏归来。地上的家，每天的家。

⑦ アステリスクを二個挿入。 ⑧ 他 ⑨ 逗号 ⑩ 的

⑪ 甚至只有更多 ⑫ 売倉

注釈：このエッセーは人物描写と創作素材に関する一連のエッセーの最後に置かれる長い作品で、重厚な思索に満ちている。また、この一連のエッセーの中には、「敵対事物」と題された小品があるのだが、文輯には掲載されていない。阿朧がこの「敵対事物」の中で批判しているのは、敵対した人物像を描く際、往々にして描写がステレオタイプに走って、軽薄な戯画化に終わる傾向である。こうして創作・執筆態度と現実・社会との問題に広く触れながら、阿朧は自らの創作論をこのエッセーに込めていった。現実の生活で泥まみれになって這いずり回るこの意味を知らない者に、新しい文学の創作は不可能である、と阿朧は主張し、自らの全生命を賭して愛せよ、行動せよと呼びかける。四〇歳になって子供を持つことだっただけならおかしなことはない、ただ自分自身が愛しているのなら、すべては真となるのだ。この最後の部分の叙述には、一人息子陳沛を得たのにもかかわらず、自殺して世を去った夫人への思いが重なっているように見える。また文中の「一脚一步地走，一分一寸地突進，一点一滴地积累，一砖一石地创造」には、阿朧の有名な長編詩「纤夫（舟を牽く者たち）」のリフレインが感じられる。なお、「爰伦堡」とはソ連の作家イリヤ・エレンブルグのことであり、ほかのエッセーにも引用が散見され、阿朧のエレンブルグへの傾倒がうかがえる。

このエッセーはかなりの長編なので、以下第二部分、第三部分に分けて考察を進める。

5、「关于现实、关于生活」(第二部分、四〇頁)

但也请看看几种人。

有这样一种人，常常说：『哎呀，我没有生活呀！』

如果这时一种谦虚，或一种要求，如果这是人不满意①于现有生活状态，或不过过去的生活实践作为限度，即向生活要求得更多，更大，更广阔，更深远，从这里再出发去拥抱世界，去发展自己——这是极好。

但如果这样，这里也就不再用再谈。事情并不如此。因为这是他没有对生活负责，或无视了生活。那么，就到这样叫屈的时候，我们就应该反问他：『你怪那个呀？你问你自己吧！』

但他没有这样客气，他没有怪他自己：相反，他所埋怨的只是②生活，就像③生活害了他一样。

但他这样说，倒也证明了一件真实，说明了一个真相：④生活里，他原来是一个『多余的人』。在生活里，他是一个瞎子。在生活里，他活着吃肉，死了——却不能卖肉。

自然，说生活⑤那到底是怎样一种生活，也不是不值得生活注意，不应该关心。如果这样，岂不是一个随波逐流的浮尸，⑥不是一个昏天黑地的白吃？不过『以五十步笑百步』，难道比他优秀么？不是的。这里只是说，生活不是一张白纸，也不应该是一张白纸，但他却把它弄得成为一张白纸。

第二种⑦。这种人，看起来，样子是相反的。我们也就听到他们常常说：『喏，我走过的桥，比你走过的路还要多得多哩！』

这所说的，如果是他生活得好，生活得荣耀，生活⑧丰富，尤其，生活得不平凡，与众不同，出人头地，而且⑨这样生活下去，那么不但他值得自豪，就是有些夸耀也不要紧，我们也不但敬爱他，钦慕他，而且还应该以他作为榜样，以他底光荣为自己的光荣。但事情也并非这样。



其实，说这句话的人，说这句话的道理，却不过是所谓『摆老资格』。而且说这话的时候，他已经没有资格，像个破落户，对于新鲜事物既没有兴趣，对于可畏的后生又自感落寞，不向前看专向后看，但又心里不服，这才说了这样的话，安慰自己，鄙落别⑩人。这是资格『老』而内容空虚，或则资格也不老而只是年龄『老』（⑪）生活虚而『摆老架子』。

所以，一位久经战斗的人，曾经对某些人说过几句意义深刻的话。他这样说：不错，你走过的『桥』比旁人底路『多』。但你走过了那么『多』的『桥』，到底那时什么『桥』？木头的还是钢骨水泥的？到底那又是怎样的『桥』？可以通过大车，还是火车？你却并不知道。这样说来（⑫）这还不如只走过一座『桥』，却知道那是在什么地方，是什么材料的，可以派什么用处的，那样的人倒是更好的。

这是一个比喻。但也就是一个『为何生活』的问题。（⑬）

第三种。⑭说：『生活，平凡。』

到这里，内容就更复杂。例如：火热的斗争的理想，年青的理想的情怀，外交仪式的客套，小屋里的苦闷，浪漫派，英雄主义，无病的呻吟，过饱的叹息，等等，等等，所以我不再用第三种『人』的说法。从而，我只打算这样说：⑮

在我们的生活里，商品，实在是一件非常平凡的东西。但马克思，⑯不是从商品的分析出发，而著作了他底《资本论》的吗？苹果成熟了，从树上落下地来，也是生活中最平凡的现象。但牛顿⑰，⑱不是从这落体现象而发现了地心吸力的吗？鸟翅底构造形式，水涡流现象，一小片纸受风的浮扬力，这一切都是平凡的事物，平凡的现象，但楚柯夫斯基⑲却从这一切的研究，创立了气体力学，是人类底活动扩张到『第五洋』去，成了『俄罗斯航空之父』。

（⑲）

这可以说：一件东西，(20) 不管那是很普通的东西，在思想家和科学家面前，(21) 它就总是不平凡的，而且愈是普通的东西，和人民生活就愈是有关系，巨人们是从这里看到那不平凡的意义，看出了那本质的意义。

这可以说：感到生活平凡，是因为他自己原来是一个平凡的人之故。

这可以说：如果从自己生活里，感到了和人民生活的联系，如果在自己底工作里，感到了那人民的意义，即使生活好像平常，工作也普通，既不特别，也不稀奇，但他，就会生活得好，生活得有意义，生活得有价值，生活有兴趣，也就不会说什么生活平凡了。何况，生活又是多采多姿的，生活在前进，而新鲜事物又每天汹涌而来呢。

一件东西，一件事情，如果，我们对于它无人时，或不去认识，那它对于我们当然是平凡的了。如果，认识了它，那它就不再是或不会是平凡的了。是认识，使平凡的东西成为不平凡的东西。但认识过程是一个行动过程，行动就不可能认识什么。而说生活平凡的人，往往就是不行动的人。他讨厌平凡的生活(22) 但又好像(23) 他否定平凡的生活，其实是安于平凡的生活。这结果是，既不认识(24) 平凡的生活，也不认识他这个『平反』的生活，他只好在无行动的状态里永远过着『平反』的生活，在无认识的状态里永远苦闷，在无斗争的状态里，在『平反』里沉沦下去，一直沉到底。

到这里，我又得转到另外一个方面去了。你疲倦了没有？(25)

原文コピーとの異同：

① 不満足      ② 却是      ③ 好像      ④ 在      ⑤ 逗号      ⑥ 岂      ⑦ 人

⑧ 得      ⑨ 是      ⑩ 旁      ⑪ 逗号

⑫ 削除された文。

你所走过的「桥」就是再「多」，「多」有什么用处？

⑬ 削除された文。

生活不是走马看花的旅行。甚至也不是真枪实弹的演习。而是敌我分明而又血肉相搏的斗争！

⑭ 指引线 ⑮ 岂 ⑯ 英文表記挿入 (I. Newton) ⑰ 岂

⑱ 英文表記挿入 (N. E. Zhukovsky)

⑲ 削除された文章 (以下の約一千字)。

狗，是平凡的家畜，果树、农作物是平凡的植物；循环系统、消化系统、神经系统，是平凡的生物的机体构造；植物底发育过程、生长过程，是平凡的自然的发展过程，等等，等等。一切在我们底平凡的日常生活世界里存在着，平凡地存在着，活动者，平凡地活动着，反复着，平凡地反复着，对于我们，好像既不重要，也不神秘，而我们也既无兴趣，又不注意。但，巴夫洛夫 (I. P. Pavlov)，米邱林 (I. V. Michurin)，李森科 (T. D. Lysenco)，还是从这里得出了条件反射的原理，大脑两半球底活动的道理，『向自然争取』而改变了自然，获得了耐寒的优良品种的水果，以春化处理的方法改造了播种季节，缩短了农作物底成熟期，提高了品质和产量，等等。不仅为此啊，你知道。你看：马克思主义暴露了资本主义底内在矛盾，教育了全世界的无产阶级，引导了变革世界的革命斗争。巴夫洛夫在心理学、医学、教育学多方地给予了全人类以巨大的贡献之外，又证明了精神和肉体的统一，根本推翻了种族和阶级不平等的资产阶级『学说』，攻破了唯心论的世界观的最后阵地，米邱林、李森科给予了社会主义农业底发展以巨大的意义之外，米邱林派学说又给予资产阶级的『遗传学』以有力的粉碎的打击，成为唯物主义底新的科学武装。这一切，你看怎样，还能够说什么『平凡』吗？不，不是『平凡』，是伟大而又伟大！

这一切是：从平凡到不平凡；从平凡出发，向不平凡上升。『万里长征走完了第一步』，决不能看轻这『第一步』。

『千丈高峰从地起』，决不能抛开这『从地起』。

十月革命之后，列宁，是怎样注意和帮助楚柯夫斯基基础研究工作的，在他工作五十年的纪念日，还以列宁自己底名字发布命令给予他以最光荣的称号。对于巴夫洛夫，也是这样，从苏维埃政府成立的那一天起，列宁就经常关心这位科学工作者，关心他底工作和生活，为他底工作在艰难的日子里准备条件，给予他们以加倍的食粮配给，后来又以人民委员会底命令决定组织一个特别委员会（里面有高尔基），保障他底工作的进行。对于米邱林的重视，情形也是如此，列宁亲自阅看他底关于栽培植物新种的实验报告，派加里宁访问他和参观他所经营的果树园；当他八十岁的一年，在他工作六十年的纪念日，斯大林还给他打了电报向他祝贺，对于他『这整整八十年的生命是一个无上的嘉奖』，使他在『这伟大的关怀中得到了幸福』。这一切所证明的又是什么呢？就是：列宁、斯大林、能够从平凡的事物里，以探照灯似的目光看到那巨大的意义；或再说，他们根本就没有把一切在生活里是那么普遍的，那么平常的，那么反复着的东西——那些我们看起来似乎是『平凡』的东西——当作什么真正『平凡』的东西。

⑳ 在巨人面前它就总是不平凡的。 ㉑ 在巨人面前它也就巨大了起来。

㉒ 逗号 ㉓ 不值得和它斗争而无斗争。在这样一个矛盾里，好像

㉔ 不 ㉕ 指引线

注釈：阿瓏はこの第二部分で人の経験とは何かを語り、真の生活実感を持つことの大切さを主張する。また「生活が平凡だ」と不平をもらす若者に対し、「平凡」のもつ極めて偉大な意義を説く。この部分では、原文からかなり大幅な削除が行われているが、それはソ連と社会主義革命の進展に関すること、そして科学者に対するレーニンやスターリンの態度に関することである。このように長い削除にはしかるべき理由がなければならないと思うが、こ

ここでは推測を避けてそのまま原文を載せることにする。最後にこの文章の読み手に対し、阿壠の「君は疲れてはいないでしょうか」という呼びかけがあるが、これは彼の優しさをそのまま物語っている箇所でもある。

## 6、「关于现实、关于生活」（第三部分、四三頁）

有的时候，由于某些原因，某些条件，我们一时还没有到所热望的生活中去的可能。有的时候，发生苦闷，不满现有的生活，也是人之情。但在这样的的时候，也决不能等待理想，而失去行动。为了想望巨大而激荡的生活，而把现有的生活放在手边让它休息，或使它烂掉的。不，这完全不对。不但大的生活是把那做好了的小的生活所累积而成的，所谓『积小胜为大胜』，而且，如果在生活里一切都应该实事求是的话，这里还是一样的。（①）

（②）鲁迅是我们的导师。但他送人的书他总要包得四四方方的，一丝不苟的。小么？小得很。但也只有在小事情上他是这样认真、实在的人，到巨大的生活中去他才会同样认真，实在，负责任。如果在小的东西上荒唐，随便，怎样可以保证他在巨大的生活中能够老老实实？实事求是对于生活中的任何事物和事情的态度。这里，可以说，并不以大小而分。小的不实事求是而大的才实事求是，小的这一半不实事求是而大的那一半（③）忽然变得实事求是，是少有的。

那么，如果说到处有生活，意思就应该是：自己随时随地都好好生活：自己首先在所谓平凡的生活里中锻炼，考验，然后发展出去。

第四种人（④）则说：这一种生活⑤是生活，那一种不是生活。我最近和F、G谈过这个问题，还有一些争论发生，事情也就是为此。

这样或那样的生活，这一部门或那一部门的生活，这一方面或那一方面的生活，等等，等等，差别当然是存在的。

这种差别而且还可以是很重大的。这不但没有问题，而且正是由于这种差别底存在和重要性，在参与生活的问题上我们还得努力去争取条件的。

但姑且打一个比方：假定大海中心是波涛一场激荡的，而边缘，则不过有一些浪花，或波动。这样说，这中心和边缘在动荡的力量上就存在着强度的差异。这个差异是不可忽略的。我们如果参与生活，如果有了条件，当然要投入波涛激荡的中心去，而不能留在海边看风景，否则就是逃避生活，逃避斗争。

但这里的问题并非这样。这里，看起来，很像为了肯定那个中心似的，但却从这一点，完全否定了边缘。这就是把一个大海分割起来，使中心和边缘机械地对立起来。于是问题就是：如果根本地取消了大海底中心也就是取消了大海本身。

如果这是强调生活与斗争，很对。如果说话的对象是一个对生活与斗争抱消极态度的或抱随便主义的人，这个说法也可以。但如果是认识论的问题，而不是行动性的问题，就是说：如果这样的说法，在他是一个一般的说法，即由于他底认识之故的话，那么，对于生活的看法，他就陷到二元论的地位上去了，出了毛病。

我们知道，只有中心而没有边缘的大海，那是不存在的，抽象的。中心和边缘不同，但又彼此相通，即有内部的联系存在着。大海底中心底激荡的力量，即不得不波动到边缘来，边缘底波动，也正是这激荡的反应，而且还不断地反作用到中心去。我们热望投入大海底中心。但如果一时是在边缘，如果善于感受生活而不麻木⑥和怠惰，那么，我们也应该能够同样感到那从中心来的动荡的力量，和从那里吸取自己底力量而肯定地生活和斗争。

再打一个比方：在前线的战斗是一种生活，在后方勤务部门又是一种生活。但不能够谈战斗是生活而后勤不是呢？不能的。⑦后勤是为了前线的，而且它本身也是战斗的力量。重视前线是应该的，但轻视后勤这就不应该了。

我们底阵地是在我们底生活里，在我们底工作岗位，它就在我们脚下。步步是阵地，步步是战斗。

因为，生活是社会生活，不是孤岛。

因为，生活里面没有真空地带。

因为，生活里面的空白区是必须消灭的。

因为，今天的工作是革命工作，每一个部门都是人民事业中的『齿轮和螺丝钉⑧』，即使有差别，也只有中心和边缘之分……却不是这是生活而那『不是生活』之分，更不能把那看成『孤岛』或『真空』。

生活要争取。生活是斗争。人到底如何认识⑨，是一个重要的问题，但他到底在怎样生活着，也同样是一个重要的问题。(⑩) 行动性是重要的。认识论也是重要的。求得得这两者的统一。

劳动吧，实践和创造把。爱吧，有一分热就发一分光吧。

你问『如何生活？』——难道生活里面还会有什么『秘密』或『秘诀』存在吗？

你问『如何生活？』——可是你已经明白首先是生活，然后是写作。这极好。但如果以为，为了写作，这世界上还有一种特别的生活法——那样的生活，却是没有的，从来也没有，永远也没有的。

原文コピーとの異同：

① 削除された文：首先做好一个小兵，然后才可以做一个好的将军；不能做或不愿意做一个好的小兵，而说它可以做一个好的而且还是一个最好的将军——你也不会相信这样的事和这样的人。

② 削除された文：斯大林是个巨人。但他连一个错误的标点符号也像对于敌人一样不能容忍，不肯放松。难道标点符号不是生活中的小东西，用错也是极平常的事？但斯大林对于它却异常认真。

- ③ 指引线 ④ 指引线 ⑤ 「生活」を付加 ⑥ 麻痺  
 ⑦ 削除された文：战斗和后勤不可分。没有后勤的战斗是不可能的。  
 ⑧ 螺钉 ⑨ 在什么生活中 ⑩ ここで行変え

注釈：このエッセーの最後に、阿壠は「小さな生活」、「つまりまもなく見える生活」こそ真の創作の源泉であると説く。削除された箇所は、ソ連とスターリンに関する部分と前線と後方支援に関するもの。このうち前線と後方の関係などは、あまりにも軍事理論的なので敬遠されたのかもしれないが、ソ連とスターリンに関する記述に関しては、単にわかりにくいという理由ではなさそうである。阿壠の創作の理論は、胡風らとの活動や討議に根ざすもので、現実の生活の中にしか真の創作の機縁はなく、現実の中で鍛えられた理念と情念が新しい文学を生むという、「主観戦闘精神」の主張が明瞭に読み取れる。典型人物論、英雄人物論、敵対人物論など、新中国建国後に一気に主流となっていく浮ついたステレオタイプ作りの文芸思潮に対し、阿壠は真剣な論戦を挑んでいたのである。最後の部分、「労働せよ、実践せよ、創造せよ、そして愛せよ。一分の熱があれば一分の光を発せよ！」とは明らかに胡風の言を引き継いだ主張である。F, Gについては誰なのか不明。

## 7、まとめに代えて

阿壠の『風雨楼文輯』所収の一部エッセーに対するテキストクリティークと注釈を試みてみたのだが、こうして丹念に読み進めていくと、編集者の態度というものが見えてくるように思う。本稿の前段に述べたテキスト修訂の



三つの特徴（1、印刷技術の未熟を補う、誤字脱字訂正のような修訂。2、原作に対する不適切な態度により、杜撰な編集となってしまう「修訂」。3、政治的と思われる意図によって行われる修正）に基づいて考えると、ほんの数箇所、1ないし2の「修訂」が見られたが、当時にあつては丁寧な編集だったといえよう。ただ、3に相当するような大幅な削除があるのは残念な結果というほかはない。これは、政治的な理由というより、現代中国の商業主義の要請による修訂と見る方が妥当かかもしれない。中国現代史の暗部に葬られた阿壘、その輝ける業績の本格的な再現はまだ遠い。今後筆者はこの校勘作業をもとに『風雨楼文輯』とその実像に関する論考を進めていくつもりである。

なお、この校勘作業の基本は数年前に大学院の授業で行った読解・講読によるものであり、「新月」各編の読解もここ数年大学院で継続的に行ってきたものである。また、前段のテキストの異同に関しては、二〇〇七年八月に慶應義塾大学で行われた台湾淡江大学とのシンポジウムでの発表に基づいている。

## 注

(一) 阿壘（本名陳守梅）一九〇七年、杭州生まれ。少年時私塾で文才に目覚めるが、三三年、戦況の悪化を受け、軍人となることを決意。黄埔軍官学校歩兵科に入学、三六年に卒業、陸軍第八十八師団少尉。三七年八月、上海防衛戦に小隊を率いて出撃、戦闘中に顔面を銃撃され重傷を負って大後方に撤退。このころから胡風の雑誌「七月」にルポルターージュを投稿しはじめ、胡風の知遇を得る。その後長沙などを転々としながら、周恩来秘書だった呉奚如のルートから延安に入り、共産党の抗日軍政大学に学ぶ。しかし軍事演習中に眼球を負傷し、治療のために西安に退く。長編小説「南京」を延安と西安で書き上げる。翌年、重慶に。胡風らの勧めで国民党軍部中枢へ入る。国民党軍事委員会政治部軍事処第二科付少佐、まもなく軍令部少佐参謀。四四年、陸軍大学に再入学、卒業後成都陸軍軍官学校の戦術

教官。SM、亦門など夥しい数のペンネームを使う。このころ共産党に、胡・呉ルートを使い国民党軍部の高級軍事情報をリーク。やがて密告者に情報漏洩が発覚し、四川を脱出。この間、成都で結婚し、男の子も儲けたが、若妻瑞は服毒自殺。阿壠は国民党の指名手配を逃れて江南を巡り、南京気象台に。その後、南京陸軍大学兵学研究院に中央研究員として入学、後に四八年には陸軍参謀学校で教官となる。昇進して大佐。四九年以後は一人息子陳沛と共に天津に住み、天津文壇の指導者のひとりとなる。大著『詩と現実』を出版し、活発な文芸評論を展開。五五年、胡風事件に連座、胡風反革命集団の指導者の一人として十二年間監禁、六七年天津監獄で病死。

拙論に「阿壠南京とその問題点」(藝文研究五六、一九九〇年一月)、「阿壠の詩論について」(北陸大学外国語学部紀要1、一九九二年二月)、「阿壠に見るタゴール受容の分岐」(藝文研究六五、一九九四年三月)、「阿壠の四十年代における特異性に関する考察」(日本中国學會「日本中国學會報」五一、一九九九年一〇月)、『A Verbouse Silence in 1939 Chongqing』(Ken Sekine, *Modern Chinese Literature and Culture Resource Center*: <http://mcl.osu.edu/rc/pubs/sekine.htm#upload/02Sep2004>)。「南京」は『南京慟哭』(拙訳、五月書房、一九九四年一月)として出版。

(2) 『風雨樓文輯』路莘編、時代文芸出版社、一九九九年一月。第三章の( )内の数字は本書の頁。

(3) 「新月」一九二八年三月、徐志摩、聞一多、饒孟侃らにより上海で創刊。一九三三年六月の最終号まで、全部で四巻四三期発行。

(4) 「新月」創刊号(第一巻第一号)は目次順に、「新月的態度」(巻頭言、徐志摩による文章、無署名)、巻頭論文「文学的紀律」(梁実秋)、巻頭小説「阿麗思中国游记」(沈從文)となっている。またこれに続き、評論「湯麦士哈代」(トーマス・ハーデー) (徐志摩)があり、後半に西滢(陳源)、胡適、聞一多らの文章が続いている。

(5) 『沈從文文集』一九八二年、三聯書店・花城出版社連合編集。引用は二一四―二一五頁。

(6) 「新月」第一巻第二号は目次順に、巻頭論文「文人有行」(梁実秋)、第二論文「元稹白居易的文学主張」(胡適之)に続き、この凌叔華の小説「瘋了的詩人」を載せている。なおこの小説の後には、西滢の小説「成功」が掲載されて

おり、凌叔華の当時における評価の高さを物語っている。

(7) 凌叔華作品選『中国現代文学作品原本選印——花之寺、女人、小哥儿』一九八六年人民文学出版社刊、一八五—一八六頁。

(8) 胡風『民族戦争與文藝性格』桂林南天出版社一九四三、二三頁、原文繁体字。

(9) 『胡風全集』第二卷、湖北人民出版社一九九九、五四四頁。

(10) 一九三八年から四〇年代の初めまで行われた郭沫若と胡風との執拗な論争。抗戦時期の文化の「普及」と「向上」をめぐるもの。一九三八年一月、郭沫若は「抗戦と文化問題」という論文の中で、現在中国に必要なものは、文化の「普及」であり、それもパブロフの「無条件反射」のように、敵日本に対して反射的に抗戦を組織し動員するような体制を築かなければならないと主張した。そして、文化の質の「向上」を唱えて高尚な論理にはかり走るような知識人達は、当面する普及の任務を軽視するばかりでなく阻害さえするような連中であり、その態度は「非国民的」であつて、甚だしきは「利敵行為の嫌疑」があると見られても仕方がないと断じた。これに対して胡風は、後に「持久抗戦中の文化運動を論ず」としてまとめられた三篇の論文の中で、名指しこそしなかつたものの明らかに郭沫若の論文を踏まえて、徹底的な反撃をした。特にその三にあたる「普及も向上も必要」の中では、実際の戦闘においては安易な「無条件反射」論のような抗戦活動はありえず、「普及」に名を借りた人民大衆に対する愚民政策は必ず破綻すると説き、より高度な質を目指す文化活動こそ、真の普及の基礎だと主張した。拙論「抗日戦争初期における重慶の新聞雑誌事情と小説「南京」(藝文研究八七、二〇〇四年二月)」を参照されたい。

(11) 賈植芳(一九一五年、山西生まれ) 胡風派の文学者。小説家、文学評論家、翻訳家。中国比較文学学会会長、上海復旦大学中文系主任、同図書館長などを歴任。おもな作品に「二三事」「人的悲哀」「人的証明」「獄裏獄外」など。